

原著

## 段階的な多職種連携教育の実践の成果と課題

山崎 律子・中野 智裕・五反田 龍宏・樫村 友隆・山田 美幸・  
阿部 一之・松田 洋和

純真学園大学 多職種連携教育専門部会

### Results and problems of stepwise education for Interprofessional Education

Ritsuko YAMASAKI, Tomohiro NAKANO, Tatsuhiko GOTANDA, Tomotaka NARAMURA,  
Miyuki Yamada, Kazuyuki ABE, Hirokazu MATSUDA

The Committee of Experts on Interprofessional Education at JUNSHIN GAKUEN University

**要旨：** 2011年に開学した純真学園大学は、保健医療学部看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科の4学科を擁し、開学時から4学科合同で段階的な多職種連携教育 (IPE) に取り組んでいる。今回、4年間の IPE を経験した学生の学修成果と、IPE における今後の課題を報告する。IPE の学修成果は、各 IPE の授業終了後に学生による授業評価アンケートを実施して評価した。アンケート項目は、チーム医療に対する理解の深化を把握するための共通項目と、他職種の理解を把握するための質問項目、並びに4年次生に対する質問項目「チーム医療で最も重要なもの」を加え、それらについてデータを分析した。

結果、チーム医療に対する理解は、学年が進行するに従って段階的に深まっていた。一方、本学で養成する看護師・保健師および臨床工学技士に対する理解において低い傾向がみられた。授業に対する意欲は、2年次で低下するものの3年次、4年次と高くなった。今後、4学科合同のグループ学修の強化および授業方法を検討する必要性のあることが示唆された。

**キーワード：** 多職種連携教育 段階的教育 評価 学修成果 チーム医療

**Abstract:** JUNSHIN GAKUEN University was founded in 2011. The Faculty of Health Sciences consists of four departments: Department of Nursing; Radiological Science; Medical Laboratory Science and Medical Engineering.

We have carried out stepwise education for Interprofessional Education (IPE) in combined lectures for these four departments from the opening of the university. In this paper, we wanted to report the results and problems of stepwise education for IPE. We performed a questionnaire for evaluation of our lectures at the end of each subject. We analyzed the data that had the same common items which could see a change in the understanding of team-based medical care and a significant thing for team-based medical care.

As a result, the students were able to have a deeper understanding about team based medical care. However, students did not have the same deep understanding of the role of nurses, public health nurses and medical engineers trained at this university. Although the motivation of students for lectures were less in the second year, it is now gradually increasing in the third and fourth years.

It is clear there is a need to strengthen the way we conduct combined lectures of the four departments and to try to devise more effective teaching methods for improved group learning.

**Keyword:** Interprofessional Education, stepwise education, evaluation, learning outcome, team-based medical care

### はじめに

近年の医療現場では、医療の質や安全性の向上および高度化・複雑化に伴う業務の増大への対応、病院の機能分化、在宅医療・福祉サービスの充実が進められており、それらに対応するためのチーム医療の必要性が認識されるようになってき

た<sup>1,2)</sup>。このことに伴い、多職種で協働しながらチームとして課題解決できる人材の育成が求められるようになり、2005年の『文部科学省の特色ある大学教育支援プログラム』から、大学教育に多職種連携教育 (Interprofessional Education, 以下 IPE) が導入されるようになった。2009年時点に

における保健医療福祉系大学を対象とした IPE の認知度調査<sup>3)</sup>では、授業の具体的内容は不明であるものの、約20%の大学のカリキュラムに IPE が反映されており、実際にカリキュラムを改正しながら効果を検証している大学もある<sup>4,5)</sup>。

純真学園大学は、保健医療学部看護学科、放射線技術科学科、検査科学科、医療工学科の4学科を設置しており、2011年の開学時から4学科横断型で、1年次から4年次までの各年次にチーム医療を学ぶ科目を配置した段階的な IPE を実践している。本学の IPE は、チームの一員として職種間のコミュニケーションを図りながら相互理解を深め、目標を共有化し、基本的に階層構造のないフラットな位置関係によって、業務を遂行できる能力を身につけることを目的としている<sup>6)</sup>。2014年に4年間を通した IPE の完成を迎えたことから、今回、本 IPE を受講した学生の学修成果と今後の IPE における課題について報告する。

## 1. 本学における IPE の実際

1年次は、「共通基盤の構築」と「他職種の理解」を教育目標に、4学科の教育内容と看護師・保健師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士の職務内容やチーム医療において果たす役割について講義形式で合同授業を行った。その後、各学科に分かれて自己の目指す医療職について理解を深めた。最後に医療現場におけるチーム医療の実践について医師が講義を行い、チーム医療の必要性の理解を深める4学科合同授業を行った。

2年次は、「関係から連携へ」と「協働の理解」を教育目標に、本学では養成しない他職種の理解に主眼をおき、講師に医師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、介護福祉士、臨床心理士を迎え、講義形式で4学科合同授業を行った。最後に医療職種間の関連性と連携について理解を深める4学科合同講義を行った。

3年次は、「医療人としての共通認識」と「他職種の専門性の理解」を教育目標に、各学科の学生が、他の3学科で養成する医療職の全般的な職務内容や医療現場における役割をより深く学べるように、各学科教員による講義と代表的な業務を実体験する演習を行った。最後に学科毎に体験演習での学びを共有し、他職種の専門性の理解および

チーム医療の必要性について理解を深めた。

4年次は、「多職種連携の構築」を教育目標に、4学科合同授業と授業内容をテーマとしたグループ学修および発表を行った。授業で取り上げるテーマは、「医療コミュニケーション」、「インフォームドコンセント」、「医療安全」とした。グループ編成は、各学科の学生数名で構成される学科混成とした。グループ内でリーダーをはじめとする各役割を決め、協力し合いながらグループ全体で学修を進めることができるように、グループによる発表とグループでまとめたレポート提出を課した。

## 2. 授業評価アンケート

授業評価アンケートは、各 IPE 科目の最終授業が終了した時点で実施した。質問項目は、学修に対する姿勢、授業全般に対する事項、授業の内容に関する事項について、5段階で評価を行った。

1年次は、学修に対する姿勢3項目、授業全般に関する事項5項目、授業の内容に関する事項9項目の計17項目について5段階評価を行った。2年次では、学修に対する姿勢3項目、授業全般に関する事項6項目、授業の内容に関する事項8項目の計17項目について5段階評価を行った。3年次では、学修に対する姿勢3項目、授業全般に関する事項14項目、授業の内容に関する事項19項目の計36項目について5段階評価を行った。4年次では、学修に対する姿勢3項目、授業全般に関する事項14項目、授業の内容に関する事項23項目の計40項目について5段階評価を行った。

授業評価アンケートについては、アンケートの目的および本調査への同意が成績とは関連のないこと、無記名であることを口頭および書面にて説明を行い、所定の場所に提出用の箱を設置して回収した。

## 3. 授業評価アンケートの結果

今回、4年間の段階的な IPE を受講した学生の学びの変化を見るために、授業評価アンケートの質問項目のうち、①各学年におけるチーム医療に対する理解の深化を把握するための共通項目、②本学の IPE で最も重要と位置づけている他職種の理解に関する項目、③4年次生に対する「チーム

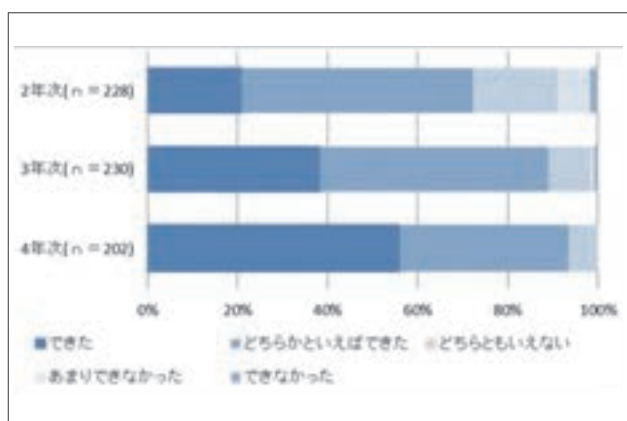


図1. チーム医療とは何かの理解

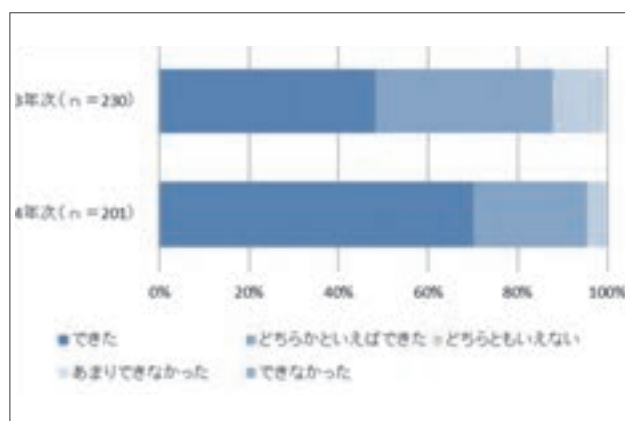


図2. チーム医療の実践が患者に安心・安全な医療の提供ができることの理解

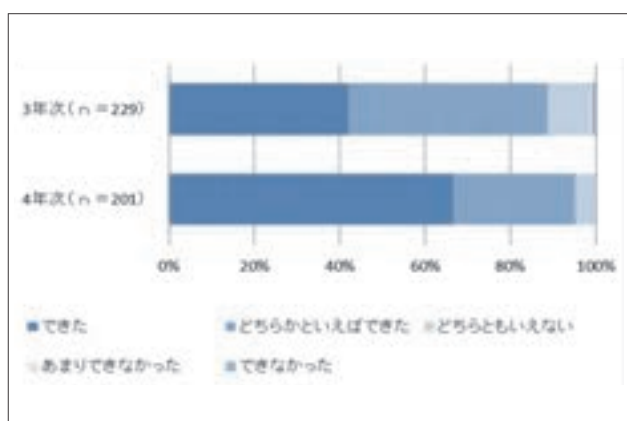


図3. チーム医療の実践のために、お互いの職務を理解することが大切であることの理解

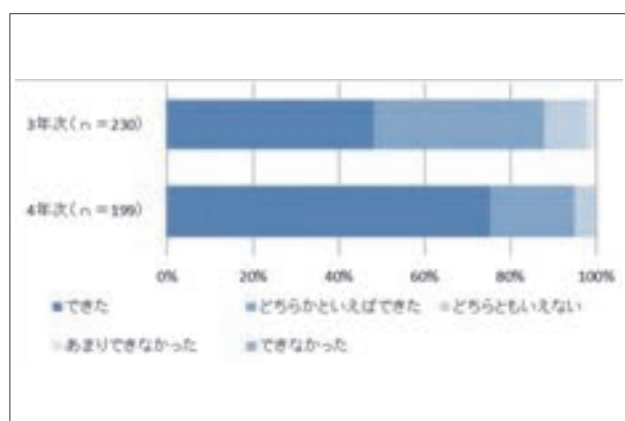


図4. チーム医療の中で互いの職種のコミュニケーションが大切であることの理解

医療で最も重要なもの」に関する項目、④授業に対する意欲、の4項目についてデータを分析した。

### 3.1 チーム医療に対する理解

「チーム医療とは何かの理解」について、2年次では「できた」が48名 (21.1%)、「どちらかというとできた」が117名 (50.9%)であった。3年次では「できた」が88名 (38.3%)、「どちらかというとできた」が117名 (50.9%)、4年次では「できた」が113名 (55.9%)、「どちらかというとできた」が76名 (37.6%)であり、「できた」および「どちらかというとできた」学生の割合が、2年次より4年次の方が、20.5%増加した (図1)。

「チーム医療の実践が患者さんに安心・安全な医療の提供ができることの理解」について、3年次では「できた」が111名 (48.3%)、「どちらかというとできた」が91名 (39.6%)であった。4

年次では「できた」が141名 (70.1%)、「どちらかというとできた」が51名 (25.4%)であり、「できた」および「どちらかというとできた」学生の割合が、3年次より4年次の方が7.6%増加した (図2)。

「チーム医療の実践のためにお互いの職務を理解することが大切であることの理解」について、3年次は「できた」が96名 (41.9%)、「どちらかというとできた」は107名 (46.7%)であった。4年次は「できた」が134名 (66.7%)、「どちらかというとできた」は51名 (28.4%)であり、「できた」および「どちらかというとできた」学生の割合が、3年次より4年次の方が6.5%増加した (図3)。

「チーム医療の中で互いの職種のコミュニケーションが大切であることの理解」について、3年次は「できた」が111名 (48.3%)、「どちらか

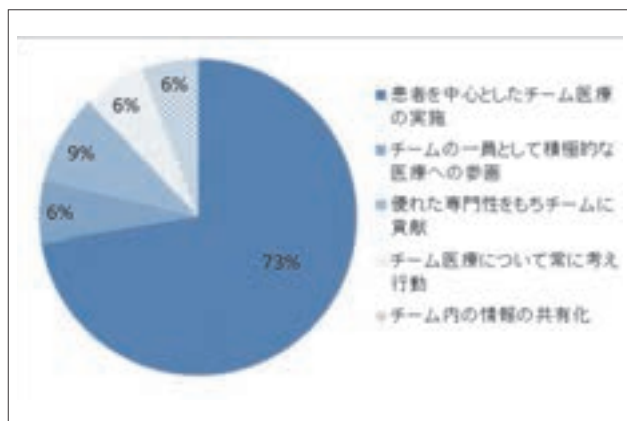
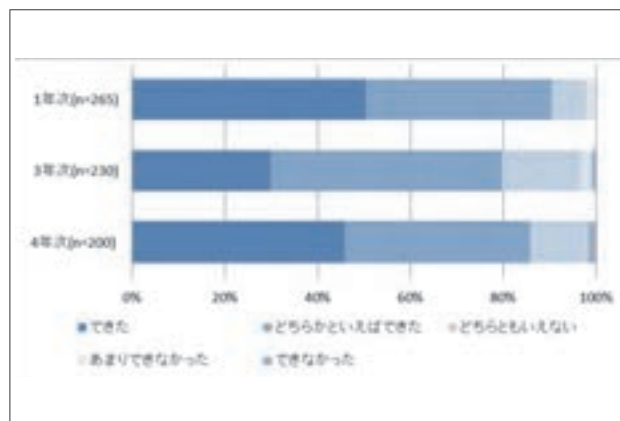
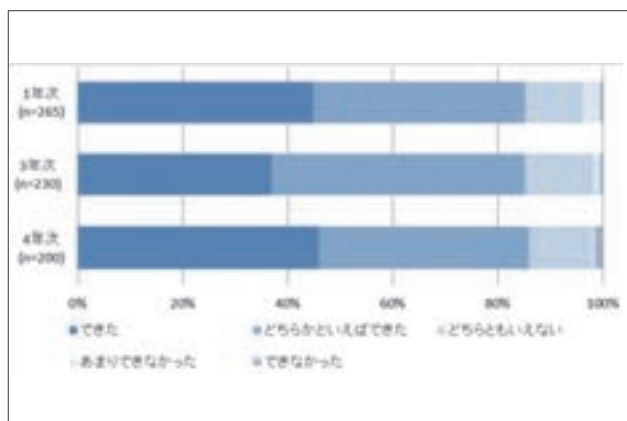
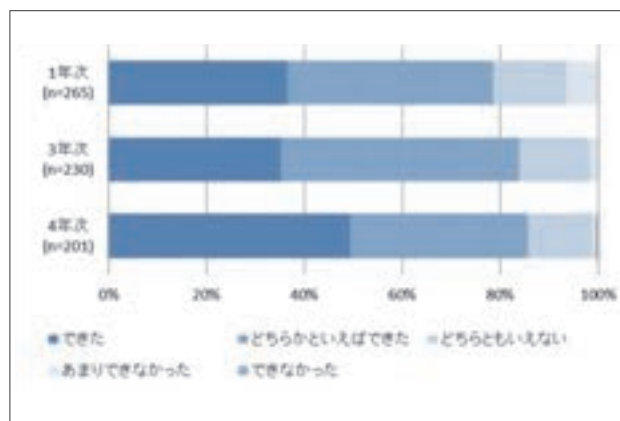


図5. チーム医療で最も重要なもの (n=174)

図6. 医療現場における職務内容や役割の理解  
【看護師・保健師】図7. 医療現場における職務内容や役割の理解  
【診療放射線技師】図8. 医療現場における職務内容や役割の理解  
【臨床検査技師】

いうとできた」は91名（39.6％）であった。4年次は「できた」が150名（75.4％）,「どちらかというとできた」は39名（19.6％）であり,「できた」および「どちらかというとできた」学生の割合が,3年次より4年次の方が7.1%増加した（図4）。

### 3.2 チーム医療で重要なもの

「チーム医療について最も重要なものは何か」という質問に対して,「患者を中心としたチーム医療の実施」と回答した学生が126名（72.4％）で最も多かった。次いで「優れた専門性をもちチームに貢献する」が16名（9.2％）,「チームの一員として積極的な医療への参加」および「チーム医療について常に考え行動する」が11名（6.3％）,「チーム内の情報の共有化」が10名（5.7％）であった（図5）。

### 3.3 他職種の理解

看護師・保健師についての理解は,1年次で「できた」が134名（50.6％）,「どちらかというとできた」が106名（40.0％）であった。3年次は「できた」が69名（30.0％）,「どちらかというとできた」が115名（50.0％）,4年次では「できた」が92名（46.0％）,「どちらかというとできた」が80名（40.0％）で,1年次が「できた」および「どちらかというとできた」学生の割合が90.6%で最も多かった（図6）。

診療放射線技師についての理解は,1年次で「できた」が119名（44.9％）,「どちらかというとできた」が107名（40.4％）であった。3年次は「できた」が85名（37.0％）,「どちらかというとできた」が111名（48.3％）,4年次では「できた」が92名（46.0％）,「どちらかというとできた」が80名（40.0％）で,4年次が「できた」および「どちら



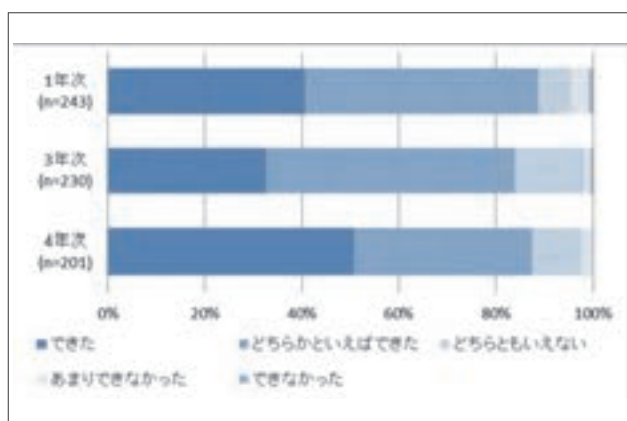


図9. 医療現場における職務内容や役割の理解  
【臨床工学技士】

かというときできた」学生の割合が86.0%で最も多かった（図7）。

臨床検査技師についての理解は、1年次で「できた」が97名（36.6%）、「どちらかというときできた」が111名（41.9%）であった。3年次は「できた」が81名（35.2%）、「どちらかというときできた」が112名（48.7%）、4年次では「できた」が99名（49.3%）、「どちらかというときできた」が73名（36.3%）で、4年次が「できた」および「どちらかというときできた」学生の割合が85.6%で最も多かった（図8）。

臨床工学技士についての理解は、1年次で「できた」が99名（40.7%）、「どちらかというときできた」が117名（48.1%）であった。3年次は「できた」が75名（32.6%）、「どちらかというときできた」が118名（51.3%）、4年次では「できた」が102名（50.7%）、「どちらかというときできた」が74名（36.8%）で、1年次が「できた」および「どちらかというときできた」学生の割合が88.8%で最も多かった（図9）。

2年次に受講したメディカルスタッフの職務内容や役割の理解について、「できた」および「どちらかというときできた」学生が最も多かった職種は医師で、「できた」が54名（23.7%）、「どちらかというときできた」が110名（48.2%）であった。以後、薬剤師、管理栄養士、介護福祉士、作業療法士と続き、「できた」および「どちらかというときできた」学生が、65%以上であった。臨床心理士、理学療法士においては、63%以上の学生が「できた」および「どちらかというときできた」と回答

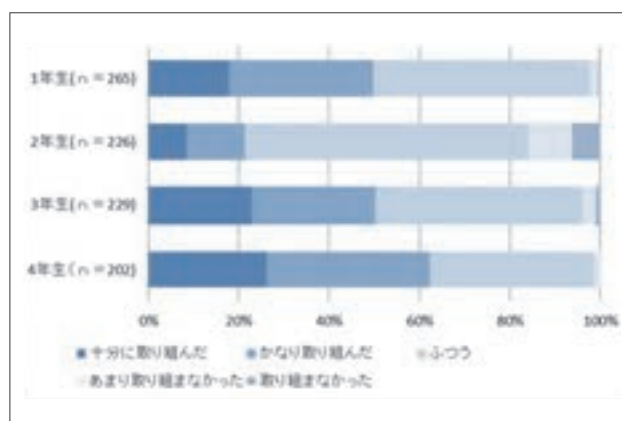


図10. 授業に対する意欲

した。

### 3.4 授業に対する意欲

授業に対する意欲について、1年次は「十分に取組んだ」が47名（17.7%）、「かなり取組んだ」が85名（32.1%）、2年次は「十分に取組んだ」が19名（8.4%）、「かなり取組んだ」が29名（12.8%）、3年次は「十分に取組んだ」が52名（22.7%）、「かなり取組んだ」が63名（27.5%）、4年次は「十分に取組んだ」が53名（26.2%）、「かなり取組んだ」が73名（36.1%）であった。2年次で一旦「十分に取組んだ」および「かなり取組んだ」の割合が低下するが、3年次、4年次で増加した（図10）。

## 4. 考察

### 4.1 段階的な IPE 教育の成果

平成22年の厚生労働省『チーム医療の推進に関する検討会』の報告書において、チーム医療とは「医療に従事する多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること」と定義づけられた<sup>7)</sup>。今回、1年次から4年次までの段階的な IPE 科目を受講した学生は、「チーム医療とは何か」に関する理解において、4年次では93.5%の学生が「理解できた」、「どちらかというときできた」と回答しており、2年次より20.5%増加していた。また、「チーム医療の実践が患者に安心・安全な医療の提供ができることの理解」が

3年次より4年次に「できた」、「どちらかというどできた」学生が7.6%増えていることや、「チーム医療の実践のためお互いの職務を理解することが大切であることの理解」が6.5%増えていたことから推して、低学年では漠然としていたチーム医療の実践について、段階的なIPE教育を受けたことで、チーム医療の目的をはじめ、構成する職種専門性や役割についての理解が深まり、結果としてチーム医療そのものの理解が深化したと考えられる。

特に本学のIPEにおいて重要なキーワードとしている「医療職間の相互理解」<sup>6)</sup>について、本学で養成する看護師・保健師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士は、4年次で85%以上の学生が「理解できた」「どちらかというどできた」と回答していた。また、本学で養成しないメディカルスタッフについては、2年次で65%以上の理解ができていた。松井ら<sup>8)</sup>の調査によると、病院に勤務する職員は、専門職種に対する理解が不十分だった一方で、職種間の関係性の構築や職種間の理解、情報の共有によって、連携協働が上手くいったと感じていたことが報告されており、「医療職間の相互理解」がチーム医療の実践に重要であることが分かる。今回、医療人育成の基礎的教育に位置づけられるIPEを受講したことによって、専門職種の理解について深めることができたことは、卒後、チームの一員として他職種と連携協働するための動機づけになったのではないかと考えられる。

しかし一方で、本学で養成している看護師・保健師および臨床工学技士について、1年次で85%の学生が理解することが「できた」、「どちらかというどできた」と回答していたが、3年次で一旦、その割合が低くなっていた。4年次に増えてはいたものの、「できた」および「どちらかというどできた」割合は、1年次が最も高く、約90%の学生が職務内容や役割を理解することが「できた」、「どちらかというどできた」と回答していた。このことから、3年次の割合が低くなった原因として、両職種に関する演習内容に加え、4年次のグループ学修において、チームの一員としてどのような職務内容や役割があるのか、理解しにくい内容になっていた可能性が考えられる。一方で、診療放

射線技師と臨床検査技師においても、「できた」のみの割合は、3年次で一旦低くなっていることから、3年次の体験演習を通して、学生は他学科で養成している専門職について理解が深まったことで、更に専門的な職務内容や役割に関する新たな疑問が生じたことによって、理解することが「できた」と回答した学生の割合が低下したのではないかと考えられる。

また、本学で養成しない専門職については、理学療法士や作業療法士、臨床心理士が、学生にとって他の専門職種よりも理解しにくい職業であったことがうかがえる結果を示した。川野ら<sup>9)</sup>は、理学療法士や作業療法士の職務内容を理解させる授業において、早期体験実習による学びを導入することで学生の理解度が高まることを報告しており、このことから講義や体験演習による授業だけでなく、早期体験実習に代表されるように、実際の医療現場でチームの一員としての職務内容や役割を実体験して学ぶことのできる教育プログラムの導入が非常に効果的であることが分かる。よって、今後は、実際の事例や医療現場を想定した状況を設定し、各職種がチームの一員としてどのような職務内容や役割があるのかを学ぶことのできる授業の導入が必要であると考えられる。

今回、学生は「チーム医療の中で互いの職種のコミュニケーションが大切であることの理解」が深まっていた。日本より早くIPEを導入している米国や英国において、多職種連携に求められるコンピテンシーのひとつとして、コミュニケーションを挙げている<sup>10)</sup>。4年次のグループ学修において、「医療コミュニケーション」をテーマとして取り挙げたことやグループ学修の実践によって、コミュニケーションの必要性を実際に経験したことで、「チーム医療の中で互いの職種のコミュニケーションが大切であることの理解」が「できた」学生の割合が高くなったと考えられる。今後は、他職種との連携協働に必要なコミュニケーション能力をより高めることができるよう、1年次から他学科との学科混成グループを編成するなどして、グループ学修のできる環境を整えていきたい。

#### 4.2 IPEにおける課題

今回、IPEの授業に対する意欲において、2年

次が他学年に比べると最も低かった。2年次は、講義形式を中心とする授業形態であり、グループ学修を行っていない。その他の学年の授業では、学科別もしくは4学科混合でグループ学修を行う機会がある。今回の結果から、講義中心の授業では学修に対する意欲が高まらないことが明らかであったことから、今後は、授業を担当する教員の協力を得ながら、グループ学修やグループ内ディスカッションの機会をもつことができる授業内容へと変更していくことが大切であると考ええる。

ところで田村<sup>11)</sup>は、わが国の大学教育で展開されている IPE プログラムの多くが事例をもとにしたグループ学修を中心としており、働く専門職間の協働の質を扱った内容が少なく、保健医療専門職中心の内容で福祉専門職教育を含む IPE が少ないこと、施設内における事例設定が中心になっていることを課題として挙げている。本学 IPE における授業では、4年次に行う4学科混合グループ学修において、事例を提供するのではなく、「医療コミュニケーション」や「インフォームド Consent」、「医療安全」に関する課題の設定に対して、学生たちは、臨地実習で体験した事例や状況を互いに出し合い、各テーマにおける課題解決に向けての取り組みを検討し、発表するという経験をしている。また、グループ発表の内容についてみると、権威勾配をなくすことや意思決定支援のための専門職としての倫理、患者中心の医療などに注目したグループディスカッションに基づいてまとめられた内容であることが確認された。このような学生同士の討論の成果として、チーム医療の理解について最も重要な項目の一つである「患者を中心としたチーム医療の実施」を理解できたと回答した学生が最も多かったと考えられる。本学で実施したこの授業内容は、田村のいう「協働の質」に関連する内容と一致するものであり、チーム医療を実践する上で欠かせない基本的態度でもある。本学において、協働の質に関連するテーマを設定してグループ学修を行ったことで、チーム医療を実践するための基本的態度を育むことができたと考える。

一方、本学の IPE では「健康課題」や「社会福祉領域」に関する内容には踏み込んでいないため、それら領域の専門職種との協働を検討するまでに

は至っていない。近年、地域包括ケアシステムの充実が求められる現状にあることから、今後は社会福祉系の学生も加えた総合的なグループ学修を行うことで、対象を多角的かつ全体的に把握しながら課題解決に取り組むことのできる能力を育むことが可能になると考える。よって、他大学との相互協力や病院ばかりでなく、地域における IPE 実習を行うなど教育環境を整えていくことが必要である。

### おわりに

今回、IPE の成果を把握するひとつの方法として、各学年の IPE 授業終了時に行った授業評価アンケートを活用した。各科目における科目評価ではなく、IPE の段階的な教育における成果を把握するために、共通する質問項目を中心にデータを分析した。そのため、今回の報告は、各学年の学修目標の達成度を評価したものではない。今後は、各科目の授業評価を行い、かつ段階的な教育方法を合わせて検討することで、より効果的な IPE となるよう努めたいと考えている。

### 文献

- 1) チーム医療推進方策検討ワーキンググループ. チーム医療推進のための基本的な考え方と実践的事例集. 2011.6.
- 2) 細田満和子. 質の高いチーム医療を目指して. 保健の科学, 57(11), 724-728, 2015.
- 3) 大嶋伸雄. 保健医療福祉系大学におけるインタープロフェッショナル教育 (IPE) の認知度と今後の発展性に関する全国調査. 保健医療福祉連係, 1(1), 27-34, 2009.
- 4) 大塚真理子. 医学部がない大学における IPE の取り組み～大学間連携による IPE 演習の実現～, 医学教育, 45(3), 145-152, 2014.
- 5) 酒井郁子, 朝比奈真由美, 前田崇, 他. 亥鼻 IPE の改善の取り組みと今後の課題. 医学教育, 45(3), 153-162, 2014.
- 6) 松田洋和. 本学における多職種連携教育 (Interprofessional Education; IPE) の取り組み. 純真学園大学雑誌, 2, 1-8. 2013.
- 7) 厚生労働省. チーム医療の推進について (チーム医療の推進に関する検討会 報告書). 2010. 3.19.
- 8) 松井由美子, 真柄彰, 遠藤和男, 他. 臨地実習施設における Interprofessional Work の現状と課題. 保健医

療福祉連係, 3(1), 2-9, 2010.

- 9) 川野道宏, 高橋由紀, 梶原祥子, 他. チーム医療学習を目的とした早期体験実習 (early exposure) の学習効果と意義－看護学科学生の実習前後のアンケート調査から－. 茨城県立医療大学紀要, 14, 123-133, 2009.
- 10) 松岡千代. 多職種連携の新時代に向けて:実践・研究・教育の課題と展望. リハビリテーション連携科学, 14(2), 181-194, 2013.
- 11) 田村由美. “新しいチーム医療 看護とインタープロフェッショナル・ワーク入門”. 看護の科学者, 東京, 137-138, 2015.